

文の解釈と作品の解釈

- 『伊勢物語』「さるさがなきえびす心を見てはいかがはせむは」考 -

栗田 岳

ある文の解釈は、時に作品全体の理解を左右する。しかし、細部に即した文の解釈は、「文学」よりも「語学」的な課題と見なされることがある。その結果、「文学」研究、「語学」研究のいずれからでも十分にアプローチされず、作品の理解が深まらないままになっている場合もあるかと思われる。本研究は、そうした問題意識のもと、『伊勢物語』十五段の「さるさがなきえびす心を見てはいかがはせむは」という文（「当該箇所」と称する）をめぐって考察を行う。

当該箇所は、昔男が、陸奥国の女に「しのぶ山しのびて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく」という歌を送り、女がそれを「めでたし」と感じたことに纏わる記述である。この当該箇所に関して、既説では〔女の自制を示した心内文〕〔田舎女との交流など笑止とする語り手の揶揄〕〔他者の心に踏み込もうとした昔男への語り手の批判〕〔返歌をしなかった女に対する語り手の非難〕といった解釈が提示されている。しかし、そのいずれにも首肯しがたい部分が残ри、定見を見たとは言えない。

以上をふまえて本研究は、中古文学作品の用例の調査を行い、次の結果を得た。

① 「めでたし」：自身が上位者と接点を持ちえた、或いは、上位者から何らかの利益が供与されたことに対し、下位者が抱く満足の感情。

② 「さがなし」：他者の思いに心を寄せることなく、自身の立場から一方的になされた言動に対する否定的な評価。

③ 「いかがはせむ」：望ましくない状況に関して、それを手の施しようのないことと切り捨てる表現。

昔男は、女を田舎には似つかわしくない人物と感じ、心を通わせようと歌を送った。しかし女は、それを田舎暮らしの我が身にもたらされた僥倖と思うのみであった。十五段は、そうした女の姿勢を、昔男の心を汲み取って向き合おうとはしない、自分本位なものとする。そして当該箇所では、そんな女の「えびす心」など見ても致し方がないと断じるのであった。

文の解釈と作品の解釈

- 『伊勢物語』「さるさがなきえびす心を見てはいかがはせむは」考 -

電気通信大学 栗田 岳

1. 序

本研究は『伊勢物語』十五段末尾の「さるさながきえびす心を見てはいかがはせむは」という文（以下、当該箇所と称する）を、どう理解するのが適当であるか、語に即しつつ分析し、それを通して、これまで様々な説が提起されてきた十五段という章段の解釈についても言及しようとするものである。次に、その十五段を引く¹。

むかし、みちの国にて、なでふ事なき人の妻に通ひけるに、あやしう、
さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく
女かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびすころを見ては、
いかがはせむは。

2. 既説、及び本研究の主張

本研究の見る範囲で、当該箇所の理解に関して既説の述べるところは、大きく四つに分類される。

① [女の心内文] 説²

昔男からの働きかけに、いったんは心が傾いた女が、とっさに自制心を示したものと解する。

② [田舎蔑視] 説³

昔男が女と心を通わせたいと願ったことに関して、田舎女にそれを求めるなど笑止であると、語り手が揶揄したものと解する。

③ [男への批判] 説⁴

他者の心の中に踏み込んでいこうとする昔男の好奇心を、語り手が批判したものと解する。

④ [女への批判] 説⁵

昔男からの歌に女が返歌しなかったことに対して、風雅を知らぬ行いであると、語り手が批判したものと解する。

¹ 引用は『新潮日本古典集成』による。

² 野口元大「みやびと愛 - 伊勢物語私論」『日本文学』110（1962年）等。

³ 渡辺実「伊勢物語の人物批評」『国語国文』36-10（1964年）等。

⁴ 後藤康文「みやび男のえびす心 - 『伊勢物語』第十五段の解釈 - 」『中古文学』47（1991年）。

⁵ 神田龍之介「『伊勢物語』における方法としての〈語り〉」『国語と国文学』78-3（2001年）。

①の心内文という理解に対しては、②が指示語「さる」の用法等の観点から異論を示した。以来、当該箇所を語り手の批評と見る向きが多い。ただ、その具体的な内容については見解が分かれている。

こうした状況をふまえて、本研究は第3節以降の考察により、次のように主張する。

昔男は、田舎には似つかわしくない人と思って、女と交流を求めたが、女はその申し出をありがたがるのみであった。当該箇所は、そんな女の姿勢が、昔男の心を受け止め、応じることのない自分本位なものであると断じた語り手の批判である。

3. 「めでたし」

当該箇所直前の「めでたし」は、昔男から「あなたの心が知りたい」という主旨の歌を送られた際の女の反応であるが、その在りようを考えるにあたり、次の(a)(b)のごとき例に注目される⁶。

(a) 衛門、かくしたまふを、思ふやうにめでたしと、男君を思ふ。

(落窪 卷三)

(b) 桂のみこに、式部卿宮のすみたまひける時、その宮にさぶらひけるうなゐなむ、この男宮をいとめでたしと思ひかけたてまつりけるをも、え知りたまはざりけり。(大和 四十)

(a)では、落窪の君を厚遇し、その実家への報復にも余念のない男君に対して、衛門が「めでたし」と思っており、価値ある上位者から受けた処遇に満足する状況で、「めでたし」という感想が抱かれる例となっている。また(b)は、女主人のもとに通ってくる式部卿宮に対し、召使の少女が憧憬の思いを持つもので、この少女は宮から何らかに処遇されたわけではない。接触の機会を持ちえたのみでも、「めでたし」という充足感が生じるということであろう。

そして、考察対象の「めでたし」は、構造的にこれら(a)(b)と等しいように思われる。昔男は都人と遜色ない女に出会って、もっと心を通わせたく歌を送った。しかし、女にとっては、その歌を送られたこと自体が果報だったのである。

なお、直接、考察対象に通うわけではないが、「めでたし」という評価・感情を全体的に捉えるために、次の例を示しておきたい。

(c) 内裏にもめでたしと見たてまつりたまひて、世の中譲りきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。

(源氏 霽標)

(d) 藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。

(枕 木の花は)

(c)は、朱雀帝が春宮を「めでたし」と感じており、(a)等のように

⁶ 以下、『伊勢物語』以外の挙例は『新編日本古典文学全集』による。

上位の者に対する例ではない。また、(d)で「めでたし」とされるのは藤の花だから、その対象は人ですらない。これらを踏まえると、「めでたし」とは、それに備わる美質や長所を存分に発揮している対象に向かう称賛の気持ちと、それに立ち会えたことによる満ち足りた思いを言うのであろう。そうした感情は、往々にして貴人に向けられもするが、それに限られるわけでもないということである。

4. 「さがなし」

前節で述べたような反応を示す女に対して、当該箇所は「さがなし」と否定的に評価する。本研究が中古文学作品の用例を調査したところ、その否定的な評価とは、他者の思いへの顧慮が無く、自分の意思にのみ即して行動することに向けられるものである。次に、「さがなし」の例を示す。

(e) この女の親の、わびしくさがなき朽媼の、さすがにいとよくものの気色を見て、かしがましきものなりければ、かく文通はすと見て、文も通はさず。(平中 二十七)

(f) 「あやしあやし。戸内にさしたるか。翁をかく苦しめたまふにこそありけれ。(後略)」と言へど、誰かはいらへむ。(中略)腹こぼこぼと鳴れば、「あなさがな。冷えこそ過ぎにけれ」と言ふに、

(落窪 卷二)

(g) 祖父大臣いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと上達部、殿上人みな思ひ嘆く。(源氏 賢木)

(e)は、娘の気持ちを無視して、男との文通を邪魔する母親が「さがなき朽媼」と評されるものである。(f)では、寒い中、典薬助が室外に締め出され、体が冷えきってしまったため、落窪の君に「さがな」と訴える。(g)の場合は、右大臣が実権を握ることとなって、その下の立場にある者たちが先行きを憂慮するという文脈であるから、この「さがなし」は、右大臣の専横により周囲が疲弊することに関わるものと解せよう。先の規定に妥当する例だと言える。

以上より、当該箇所は、昔男から交流を求められたにもかかわらず、その働きかけに自足するのみである女の姿勢に対し、相手の思いを汲み取らぬ、自分本位な態度と難ずるものと考えられる。

5. 「いかがはせむ」

ここでは「いかがはせむ」との比較により、「いかがはせむ」の意味するところを検討する。

(h) げに今さらさやうにならびなき有様はいかがはせむなど思ひて、

(和泉式部)

(i) かかるもいとかたはらいたくおぼゆれば、いかがはせむ、た

だともかくもしなさせたまはむままにしたがひて、さぶらふ。

(和泉式部)

(h)と(i)は、共に和泉式部が宮邸に迎えられることに関わる例であるが、(h)では宮邸入りを持ちかけられて、どうしたものかと悩んでいるのに対し、(i)の場合は、宮邸に入った後、今さら仕方がないと開き直るかの口ぶりとなっている。

(j) 三尺の御几帳一つぞいるべかめる。いかがせむ。誰に借らまし。

(落窪 巻一)

(k) 「いと馴々しうはべれども、また見知る人の侍らばこそあらめ、

いかがはせむ」 (落窪 巻一)

(j)と(k)も、落窪の君に男君を迎える支度のないことに関して、あこきが苦慮している点で共通する。(j)は、几帳の調達先を考えるものだが、(k)では、他に方法がなく、あこきの袴を落窪の君に提供すると申し出つつも、その僭越さには恐縮するという文脈である。

これらの比較から、「いかがせむ」の場合は、事柄に即して判断をまとめようとしている様子が見て取れよう。一方、「いかがはせむ」からは、対処のすべが無いことによって喚起される話し手の情意が認められる。当該箇所においても、「さがなきえびす心」などを見たところでどうしようもない、つまりは、何にもならない、無意味であると、感情的に断ずる性格が読み取られることになるのである。

6. おわりに

ここまで述べてきた、当該箇所に対する本研究の理解は、語り手による女への批判という点で、既説の中では④にもっとも近い。ただ、本研究は、返歌をしなかったことが野蛮とされているのではなく、昔男の思いに寄り添わなかったことが身勝手とされていると考えるわけである。

そして、女が返歌しなかったことに関して、次掲(1)を視野に収めてみると、①の見解は、当該箇所という文には妥当せずとも、十五段の解釈にとって意義深い視座を示していることがわかる。

(1) めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどのいみじうかひなければ、
なかなか、世にあるものと尋ね知りたまふにつけて涙ぐまれて、さらに
例の動なきを、 (源氏 明石)

明石の君が、光源氏から送られた歌に「めでたし」とは思うものの、彼我のあまりの懸隔ゆえに、関係に踏み込んでいくことができないという例である。①とは、十五段の女からも、この明石の君のごとき思いを汲み取ったうえでの理解であろうし、そうした視点自体はもっともなものかと思われる。また、女の置かれる状況に目を向けることなく、「さがなきえびす心」と批判する当該箇所は、あくまで都人の側にのみ立脚している。そうした在りようからは、②の理解に通じる質が看取されるであろう。